

私は優香に美佐子の事を話す。

仕事帰りの喫茶店で、私の正面の席に座りオレンジジュースを飲もうとしていた優香の手が一瞬止った。脅えたような瞳が上目使いに私を窺い、そして視線が私を離れた時、彼女は唇を湿す程度にジュースを飲んだ。

「そう……話したの……」

彼女のその声は、隠しきれない動揺を滲ませた小声だった。

「それで……どう言ってた……その人？」

優香が当然予想される答えを想像し、目を伏せる。

私は彼女を安心させるように、わざと陽気に答える。

「笑ってたよ、男はどうしようもないってね。それで、美佐子に君の事をみんな話したよ、公園の事も君の昔の事もね」

優香が目を上げる。

「どうしてそんな事まで……」

手がオレンジジュースが満たされたグラスを握り締めている。

私は、そんな彼女をまっすぐに見詰めながら言う。

「君とも美佐子とも別れなくなかったからだ、美佐子に隠しながら、美佐子の事を知っている君と付合っていけるほど俺は器用じゃないからね」

優香が私を見詰める。そして少しの間を置いて、その瞳にゆつくりと理解の表情が浮んだ。

「それに……」

私は言葉が続ける。

「君に美佐子に合って欲しいんだ」

「私がその人に合う……？」

「そう、君には美佐子を知る事はプラスになると思うよ。全ての面でね」

「知る……美佐子さんを……」

優香は再度目を伏せ、考える。私が最後に付加えた言葉について、そして、先日の自分の部屋

でのマスターベーションを思い返す。

私はそんな彼女を見詰めながら、先程の彼女の言葉を思い起す。優香は否定しなかった。少なくとも即座には。

私は彼女を促す。

「実は今日、美佐子には君を連れて行くと話してあるんだ」

優香が顔を上げ、その表情が一瞬、泣崩れる直前であるかのように歪むが、それはすぐに元に戻り、やがて彼女は小さく肯いた。

先にテーブルを立った私に少し遅れて、殆ど口を付けていないオレンジジュースを残し、優香が立ち上がった。

優香の手が私の腕を掴む。その手は微かに震えていた。



「ごめんなさい……」

それが、私の隣に座った優香が、テーブルを挟んで正面に座る美佐子に対して言った最初の言葉だった。

私達三人は先日、美佐子と私が絡み合ったソファアに座っていた。よく探せばワインの染みが見つかるかも知れない。そしてこのソファアに優香を座らせた美佐子の企みを私は感じ取っていた。

美佐子が優香に言う。

「そうよ、あなたは泥棒で覗き魔よ」

優香がその言葉に目を伏せ、身体を縮める。だが、その言葉の後に続いた美佐子の小さな笑い声に、優香が顔を上げる。

「フフフ……。って、私が言うと思った？ 私はそんな事言わないし、思ってもいないわ。その人からみんな聞いたわ、あなたの事……」

美佐子がソファアから立ち上がり、優香の頬にその手で触れた。

「可哀想に……」

そんな急な美佐子の行動に、最初は驚いた優香であったが、やがて彼女の表情は安堵に緩み、そしてその瞳は潤みはじめていた。

先程の言葉は、美佐子の優香に対する小さな復讐だったのかもしれない。私は、優香の頬を撫で続ける美佐子を見る。その彼女の瞳は、彼女とのセックスの直前に見た寛えのある光で輝いて

いた。

美佐子が優香の唇に触れ、優しい口調で囁く。

「立って……」

その言葉に素直に従いつた立ち上がった優香に、美佐子が歩み寄り、そしてその頬に唇が触れた。

優香が反射的に美佐子から離れようとするが、美佐子の手がその肩を抱き止める。

「あっ……」

小声を漏らす優香の唇が、美佐子の唇でふさがれた。

濃厚な口付の中で、最初は抵抗するかのよう握り締められた優香の手が、美佐子の肩に触れた。

美佐子が唇が離すと、頬を染めた優香が戸惑ったようにように呟く。

「……こんな事……」

「可愛いわ……あなた……」

美佐子が明らかに昂ぶりを示している瞳で優香を見詰め、囁く。

「シャワーを浴びてらっしゃいよ」

「シャワー？」

優香が問い返す。

「そうよ、浴びてらっしゃい……。その後で……」

美佐子が妖艶な微笑を浮べる。

そんな彼女を優香が脅えたような瞳で見返し、そして救いを求めるように私に視線を向ける。  
「……」

無言で見詰め返す私の視野の中で、優香がゆっくりと肯いた。

「はい……」

「女性が女性を決心させる時も、男と同じやり方をするんだな」

私は、優香がシャワーを使っている音を聞きながら美佐子に言う。

「フフフ……、シャワーの事？」

美佐子が微笑しながら問返す。

「そうだよ」

「あの子、可愛いわ……。とっっても」

そう囁いた美佐子の微笑に、私はカリカチュアされた牝ネコの姿を思い浮べる。

「脱衣所にいつもの香水を置いてあるの。あの子香水をどこにつけて来ると思うっ？」

「……君はセックスに関しては貪欲だな」

私は笑いながら言う。

「フフフ……嫌い？」

「いや、そんな君もたまらなく好きだよ」

美佐子の微笑が深くなり、私に唇を重ねてきた。昂ぶりを示すように、舌が貪婪に口の内を舐め回した。

私との食うようなキスの後、彼女がその場で服を脱ぎはじめた。全裸となった時、私は美佐子の身体からいつもと違う香水が匂っている事に気付いた。

私の怪訝そうな表情に彼女が微笑みで応えた時、バスルームのドアが開き、バスローブに身を包んだ優香が現れる。

優香は、平然と部屋の中で全裸を晒しているの美佐子に驚きの目を止め、足を止める。視線が恥ずかしげに逸らされた。

そんな彼女に美佐子が振り返り、優しい命令口調で言った。

「こつちに来なさい……」

それでも動こうとはしない優香に、美佐子の声が少々強まる。

「早く」

優香が恐る恐るといった足取りで美佐子に近付ていく。途中、私にすぎるような視線を向けるが、私はただ微笑のみで優香に答える。

美佐子が、自分の目の前に立った優香の顎に手を当て、上向きにし、その唇を奪う。

「あっ……」

優香にしてはまだ二度目の同性とのキスであったが、既に覚悟を決めたのか、その瞳がゆっくりと閉じられる。しかしその一瞬後、舌が優香の唇を割ったのだろう、瞳が驚きに見開かれる。

離れようとする優香の身体を美佐子が掴み、自分に引寄せると、まるで形だけの抵抗であったかのように、すぐに優香の身体から力が抜けていった。

唾液の糸を引き、美佐子の唇が優香の唇から離れる。もう抵抗する気も失せた優香が溜め息のような息をつき、ぼやけたような視線を彼女に向けた。

美佐子が、微笑と言うには強すぎる笑いを浮かべ、優香の固く結ばれたバスローブの紐を解く。強すぎる香水の匂いを撒き散らしながら、優香の身体からぬめるようにローブが床に落ちていく。

「大きくて綺麗な胸……」

美佐子が、優香の乳房に触れながら言った。

優香が頬を染め、腕で胸を庇うと美佐子が更に一步、彼女に近付く。美佐子は自分の二つの乳房を両手で持ち上げ、その先端ので既に固くなりだしている乳首を、優香の乳首に軽く触れさせ

る。

「あっ……」

淡い色をした突起が触れ合った時、優香が小さな声を上げ、彼女の乳首もまた形をはつきりとさせはじめる。

「さあ……私にもして……」

美佐子が、頬を染めて彼女から視線を外す優香に言った。

「……はい」

半ば掠れた声で答えた優香が、自分の二つの乳首が美佐子の乳首と触れ合うように乳房に手を添えて持ち上げ、二人の女は互いの固くなった乳首を擦り合せはじめる。

「貴方可愛いわ……とっても」

そう囁く美佐子の声は、既に欲情の色合を滲ませている。

美佐子が優香の前で屈みこむようにして、彼女の固くなった乳首を口に含む。同時にその手は、彼女の反対の乳首を指で摘まみ上げ、刺激する。

「ああ……」

同性ならではの美佐子の愛撫によって優香の吐く息が荒くなり、そしていつしかその手は、美佐子の頭を抱きかかえていた。

美佐子が唇を離し、自分の付けている口紅によって赤く飾られた優香の乳房に触れ、ゆつくりと揉み上げながら囁く。

「あなたの、見せて……」

「えっ？」

「あなたの、もう濡れている所を見せて……」

「……そんな……」

優香が首を振ると、彼女は優香の頭を抱かかえるようにして彼女の耳の後ろ側に舌をはわしながら、囁く声を愛撫のように吹きこむ。

「だって、公園で私の、見たでしょ……あなた。だから……あなたのも見せて欲しいの……。さあ……」

美佐子が軽く優香をソファーに向かって押すと、優香がソファーに倒れこむように座りこむ。

そんな優香の正面に立った美佐子が、まるで命じるように言う。

「脚を開いて。見せるのよ、私に」

美佐子を見上げる優香の表情が今にも泣き出しそうに崩れるが、その乳首はまだ固くなったままであった。

優香がゆつくりと、目を伏せながら脚をソファーの上に持ち上げ、開きはじめる。

香水が一層強く辺りに漂いはじめた。

優香はその秘めた女の全てを、美佐子と私の視線の中に晒け出す。

「ああ……」

まるであえぎような細かい声を漏らす彼女の性器は、それでもはつきりと解る程に妖しく濡れ光る艶を放っていた。

私はそんな彼女を見詰め、先日美佐子が、今の優香と同じ格好でそのソファアに座り、ワインの瓶を自分の中に挿入した時の事を思い返す。その時の美佐子の姿と今の優香の姿が脳裏で重なり合い、そして私の中で欲情が高まっていく。

「次は後ろからよ」

美佐子が優香に命じる。

「ゆるして……」

涙声で訴えながらも優香がソファアの上で姿勢を変えはじめる。

ソファアの背を掴み、私達に尻に向けた格好となった彼女の、その開いた太股の間に濡れた肉褌が光る。

「もっと突き出して、見えないわ」

美佐子の言葉に優香がおずおずと尻を突き出す。

「駄目、まだよく見えないわ。」——「お尻を自分で開きなさい、あの時の私のように」

「うう……」

優香は他人の目前に晒け出している自分の姿を意識し、その恥ずかしさと、そしてどこかそれを楽しんでいる自分の気持ちを整理出来ないまま、しゃくりあげ、ソファアの背を握っていた両手をおずおずと尻に回す。

「開いて」

「……はい」

追い撃ちをかけるような美佐子の声に、優香は両手で尻房が歪むほどに強く掴み、そして思い切ったように大きく割り広げる。

剥き出しになった彼女のそこは、外側の肉褌が左右の尻肉に引かれ広がっており、その奥の繊細な女肉は艶を見せる程に張詰めている。そしてその更に内側の窄まった隆穴は、半ば口を開き、透明なぬめりをしたたる寸前にまで湛えている様子をはつきりと見せていた。

「ああ……」

優香がまるでそのさらけ出している部分で、私と美佐子の視線を直接に感じたかのように身を震わせ、声を漏らす。しかし、彼女がそうする都度、彼女のその部分からは透明な線が滲みだし、遂に性器から溢れたそれは太股の内側に細い透明な線を引いていく。

美佐子が身を屈め、床に膝を付く。

彼女は目前の優香の股間を見詰め、そこに手を伸ばしていく。中指が触れた途端、優香が驚きの声を上げ、その尻を掴んでいる手から一瞬力がぬける。

「駄目、そのままにしておくのよ。気持ち良くしてあげるから」

「でも……」

「なに？」

「……こんな事って……」

戸惑う優香に美佐子が微笑む。

「変？」

「……」

「そんな事、すぐに気にならなくなるわ……」

囁きながら美佐子は、中指をゆつくりと優香の肛門から性器へとわしていく。彼女のその部分に纏わりついているしたたりが美佐子の指をぬめらせ、そのスムーズな動きに優香の息が荒くなっていく。

「……あつ」

美佐子の指が、優香の性器に触れる。既に捲れ上がっている外側の肉襞を更に開くようにその指は奥に潜りこみ、そしてもつと敏感で薄い内側の肉襞の表面を撫ぜはじめ。

「うう……」

優香がかみ殺した低い声を漏らす。その声にははっきりとした快樂の色合が滲んでいた。

美佐子が優香の愛液を掬い取った指を鼻先にもっていく。

「たくさんここに香水を振ったのね？ あなたの匂いが解らないわ……」

「……」

顔を赤らめ答える事も出来ないでいる優香に、美佐子が再び微笑を浮べる。しかしその表情には別の感情が混じりこんでいる。

「どうなの？」

美佐子が設問の口調で言い、優香の股間に再び手を伸ばす。

「ああ！」

女の最も敏感な部分に触れられ、そこを巧みに愛撫される優香が押えきれない声を上げ、腰をくねらせる。

既に優香の滲ませたぬめりで濡れている美佐子の指に、新たに肉穴から滲みだした熱いしたたりが絡み付き、いつそうその動きがなめらかになっていく。

美佐子の指に愛撫され、淫らに歪む優香の秘肉。時折そこは収縮するように蠢き、その動きに連動して上の小さな窄まりまでもがヒクヒクと震える。

部屋に優香の上げる小さな快樂の声と、荒い息遣いの音が流れはじめ。

「どうなの？ 優香。ここを見られて、こうされるって解っていたんでしょ？ だからたくさん香水を付けたのね。ここをこうされたかったんでしょ……あなた？」

女性の快樂の箇所を知りつくした美佐子が優香を追いこんで行く。

指が極めて軽く陰核を摘まみ上げる。

「ああ！」

続けて美佐子が、触れる程に軽くその尖りを指の間で愛撫しはじめると優香は、堰を切ったように腰を震わせ、全身を快樂に悶えさせる。

いつそう大きく、そして激しくなった優香の喘ぎ声に美佐子の声が被さる。

「正直に言うの……そしたらもつと気持ち良くしてあげるわ」

優香は、焦らすように愛撫を強めない美佐子の指にもどかしげに尻を振り、あえぎを漏らす。

一瞬だけ美佐子が、優香の求める刺激を送りこんだ。

「ああ！！」

優香がまるで絶頂のそのような声を上げる。

「どうなの？」

「そう……そう……そうです」

優香の声に美佐子が薄く笑い、その舌が唇を舐める。

「何が、(そう)なの？」

美佐子の優香に与えつづける刺激が、更に弱くなる。

「ああ……。お願い……」

「答えるのよ。そうしたらもつと気持ち良くしてあげるわ」

「ああ……そうです、そうです。二人に恥ずかしい所を……見られて、触られると思ったから……」

……香水を、香水をたくさん……振ってきました……」

「うふふ……イヤラシイ女……」

美佐子が匂いたつような妖艶な微笑を浮かべ、そして揃えた二本の指を優香のほぐれきった肉穴にゆつくりと挿入していく。

「ああ、ああ！」

指が淡い粘膜を押し広げて潜りこんでいくと、優香は背中を反り返して反応し、尻を挿んでいく手の指が、そのこめられる力によって白くなっていく。

揃えた指を根元まで埋めた時、美佐子が優香の肉穴が示す抵抗に思わず声を漏らした。

「きついわ。まだそんなに馴れていないのね」

美佐子が快樂に悶える優香を尻目に、背後の私に向けて悪戯っぽく聞く。

「ふふ……随分と楽しかったでしょうね？」

「ああ」



私が調子を合わせるように答えると、美佐子は更に微笑みを深め、そして再び優香に視線を戻す。美佐子が秘肉の中に埋めた指をゆっくりと前後に動かしはじめた途端、優香が押し殺した重いうめきをあげたが、それはすぐに激しい快楽の喘ぎに変わった。

挿入された指に操られるように優香の腰は淫らに動きはじめ、後ろに向かって突き出した格好の尻の狭間では秘肉が、出し入れされる指の動きによって淫らにその形を変える。それはまるで与えられる快楽を貪られずにはいけない、女の本能の動きのようであった。

美佐子は乱れる優香を満足げな表情で見詰めながら、もう片方の手で彼女の張り詰めた尻を撫でさする。

したたり落ちる快楽のぬめりによって濡れ光った指のすぐ上の、ヒクヒクと細かい収縮を繰り返している優香の小さな窄まりに美佐子の手が触れる。

「この気持ちよさも教えてあげるわ……」

そう囁やく美佐子の瞳は、貪婪な光を湛えてる。

美佐子は身体を優香にすり寄せ、尻を撫で回していた手で窄まりを剥き出しにするように、その周辺の分厚い肉を押し広げていく。

奥をまさぐる指の動きに連動し痙攣を繰り返している小孔が剥き出しにされ、その感触に優香が振り返る。

「なに？ 何を？」

美佐子は微笑みで応え、そして手で押し広げながらその窄まりに顔を寄せていく。

「あつ、いや、そんなところ……」

美佐子の伸ばした舌尖が優香の窄まりを捕らえる。

「あぁっ……！」

身体の中でもっとも秘められた部分をはう舌の感触。そんな奇異な味わいに優香が激しく反応する。

「ああ！ だめ、だめっ……」

身体をよじる優香の二つの個所に取り付いた美佐子が、その指の動きを激しくし、尖らせた舌尖が小孔の中心をまさぐるように舐めはじめた時、優香の上げる声が一際甲高くなった。

「ああ！」

優香の腰の動きが大きくなり、そして美佐子は、秘部を犯している手の小指で優香のその存在を誇示するように固くなった肉の芽を探り出す。

したたりの糸をひく美佐子の小指が、優香の肉の芽を優しく押しつぶすように愛撫した瞬間、優香の身体が大きく震え、そして美佐子によって三つの性感帯を同時に刺激されるその快楽に、すすり泣く声にも似た喜びの喘ぎを上げる。

優香が全身を快楽に波打たせ悶え続ける。しかしそんな中でも美佐子は巧みに彼女の快感の度

合を計り、その絶頂の一步手前で手の動きを中断した。

「あっ！お願い……。お願い……」

肩越しに振り返った優香が美佐子に哀願する。その頬はまだ乾いていない涙で濡れている。

美佐子が、私に誘い掛けるような視線を向け、床に付いていた膝の片方を立てる。

開かれた彼女の股間から覗く秘部は、優香と同様に濡れそぼっていた。

「来て……」

美佐子の誘いに私はその場で服を脱ぎ捨て、そして彼女に向かって、彼女の濡れた股間と、女達が繰り広げる快樂の場に向かって、歩み寄っていく。

以下、次回へ